

lan 'debs tshul (答弁法) の変遷

小 野 田 俊 蔵

サキヤパンディタ・クンガーゲーツェン Sa skya paṇḍita kun dga' rgyal mtshan (1182-1251) が著した論理学書『リクテル (*Tshad ma rigs pa'i gter*)¹⁾』ではサンプ僧院に於けるチャバ流 (Phya pa'i lugs) の論理学説が頻繁に批判されている。別稿²⁾ に於いて筆者はプラサンガについてのサキヤパンディタの批判を紹介したが、そのおりにそのプラサンガに対する答弁の方法 (lan 'debs tshul) の説明でサパンとチャバ流との両者の意見がどうしても噛み合っていないことに気が付いた。即ち両者の前提自体が異なっているのではないかと思ったのである。サパンが活躍した時代以後サンプ僧院も大きく変貌を遂げたため、チャバ流側の反論を正確に後付けて確認することが出来ないのであるが、後世の文献に見られる断片的な記述からその周辺を探ってみようとするのが本稿の目的である。

『リクテル』で批判されるチャバ流の答弁法とは次のようなものである。

“thal 'gyur lan ni sgo gsum zhes// kha ba can pa de skad smra//³⁾ (プラサンガの答弁には三種があると、雪山派 (チャバ流) の者はそのように言う)”

この部分をサパンは自註で解説し、

“bod rnams thal 'gyur gyi lan la gtan tshigs ma grub/ khyab pa ma grub/ 'dod thog ces gsum las mi srid do// zhes zer ro//⁴⁾ (チベットの人達はプラサンガの答弁には、「論拠が不成立である」「遍充が不成立である」そして「然り」との三つ以外にはあり得ないのである、と言う)”

とする。また、『ケージュク (*mKhas pa rnams la 'jug pa'i sgo*)』及び『ケージュク自註』ではサパンはこの部分を更に詳しく説明し、

“bod rnams thal 'gyur gyi lan la gsum ste/ phyogs chos med na gtan tshigs ma grub/ 'gal ba'am ma nges pa gnyis la khyab pa ma grub pa/ khas blangs pa dang mthun na 'dod pas lan 'debs so//⁵⁾ (チベットの人達はプラサンガの答弁は三つであって、主題所属性がなければ「論拠が不成立である」、相違因あるいは不定因の二つには「遍充が不成立である」、自分の本来の主張と合致する場合には「然り」と答えるのである)”

と報告している。さて、『リクテル』に於いても『ケージュク』に於いても、このチャバ流の答弁法は批判の対象として紹介されているものである。サパンの批

判を『リクテル自註』を使って見てみよう。

“mthun phyogs mi mthun phyogs gnyi ga la 'jug pa'i ma nges pa dang/ mi mthun phyogs kho na la 'jug pa'i 'gal ba gnyi ga la khyab pa ma grub pa'i ltar snang gcig tu 'gyur la 'dod na ltar snang thams cad gtan tshigs ma grub pa dang khyab pa ma grub pa gnyis su 'gyur ro// de lta na skyon thams cad ma grub pa gcig tu 'du bar 'gyur bas/ mthar thal 'gyur skyon can thams cad la ma grub ces brjod pas lan thebs par 'gyur ro//⁶⁾ (同品と異品との両者にまたがる不定因と、異品だけにある相違因との二つ共が「遍充不成立」の誤謬一つになるとするなら、誤謬すべてが「論拠不成立」と「遍充不成立」の二つになってしまい、[更に] もしそうなら、誤りすべてが「不成立」となるから、しまいには誤ったブラサンガのすべてに「不成立=不成」と答えればよいことになってしまうだろう。)”

と批判している。サバン自身の意見は、

“thal ba'i lan ni/ 'gal/ ma nges/ ma grub/ 'dod pa grub pa ste sgo bzhi'o//⁷⁾ (ブラサンガの答えは「相違」, 「不定」, 「不成」, そして「然り」の四種である。)”

と記されている。

さて、ツォンカパの高弟であるケートゥブジェ (mKhas grub rje, 1385-1438) がこの点に関連して興味深い意見を述べている。

“khyab pa 'gal ba dang ma nges gnyi la khyab pa ma grub ces pa'i lan gyis chog na/ 'gal dang ma nges rigs gcig tu 'gyur zhes zer pa ni/ rang nyid kyis/ rtags ma nges pa la rtags ma grub pa'i lan 'debs par byed pa la yang mtshungs so//⁸⁾ (もし [対論者が] “遍充の相違と不定の両者に「遍充不成立」との答弁が許されるなら、相違と不定とは同種となってしまいうだろう” と言うなら、[次の様に言い返すことが出来る], [対論者] 本人自身が「因不定」に「因不成」と返答するのにもあてはまるのだ、と)”

ケートゥブジェ自身の意見では「論外である (khas len med)」という返答を加えてはいるが基本的にはチャパ流と同じく「然り ('dod)」 「因が不成立 (rtags ma grub)」 「遍充が不成立 (khyab pa ma grub)」 を正しい返答の仕方としている。上記のケートゥブジェの意見はあるいはサンブ僧院側の反論を反映したものかも知れない。

また、サキャ派の学僧シャーキャチョクデン gSer mdog paṇ chen Śākya mchog ldan (1428-1507) が著した『リクテル』の解説書には次のような記事がある。

“gal te ma grub pa la/ rtags ma grub dang/ khyab pa ma grub pa gnyis su nges par

'byed dgos so/ zhe na/ 'o na khyab pa ma grub pa la'ang/ khyab pa 'gal ba dang/ ma nges pa gnyis su 'byed dgos par mtshungs te/ snga ma dang rgyu mtshan khyad par med pa'i phyir⁹⁾ (もし、「不成立」を「因が不成立」と「遍充が不成立」との二つに区分する必要があると〔対論者が〕言うならば〔その同じ理屈は〕「遍充が不成立」も「遍充相違」と〔「遍充」不定〕との二つに分ける必要があるのにもあてはまるのだ。前者と理由に違いは存在しないからである。)”

これはチャパ流による別種の反論を反映したものであろう。

チャパ流の返答法とサパンのそれとの最大の違いは「相違」と「不定」を「遍充不成立」という一つの返答だけに納めてしまっよいか否かという点にある。『リクテル』ではこの点だけを取り出して論議されている。すなわちサパンによればチャパ流の返答法は「相違」と「不定」を分けて説明したダルマキールティの所論と相違するということである。ところが、実はチャパが返答を三種としたのはこのような能証の誤謬の種類を述べた訳ではなかった。あくまでプラサンガに対する返答法に関して言ったのであった。

シャーキャチョクデンは『リクテル難語釈』の中で推論式の作法に関して、興味深い報告をしている。即ち、新論理学派 (tshad ma gsar ma) の創始者であるゴクロツァーフ (rNgog Blo ldan shes rab, 1059-1109) は次のような作法を採用していたとされる。

“rNgog lo chen po/ grangs can sgra rtag par khas len pa la/ gang rtag na ma byas pas khyab dper na nam mkha' bzhin sgra yang rtag par grangs can gyis khas blangs so/ zhes pa lta bu chos 'thun pa can dang/ gang byas na mi rtag pa yin pas khyab dper na bum pa bzhin/ sgra ni rtag pa'i phyir ma byas par thal lo zhes pa chos mi 'thun pa can gyis sbyor tshul du bzhed do//¹⁰⁾ (ゴク大翻訳官は、声が常住であると主張するサーンキャ学派の者に対して、“およそ常住ならそれは必ず生じてきたものでないものである。例えば、虚空のように。声もまた常住であるとサーンキャ学派の者は主張する”というように〔まず〕所属性を〔述べ〕、そして“およそ生じてきたものならそれは必ず無常である。例えば、壺のように。声は常住であるから生じてきたものでないものとなるはずだ”と矛盾を〔次に〕述べる作法を説いている)”

シャーキャチョクデンはチャパやサパンによるプラサンガの作法についても報告し、

“slob dpon rigs pa'i dbang phyug phyas pa ni/ grangs can de ltar khas len pa la/ gang rtag na ma byas pas khyab dper na nam mkha' bzhin/ sgra yang rtag par khas blangs

so shes pa tsam zhig 'god par bzhed cing/ 中略 rigs gter las ni/ phal cher 'di dang 'thun par bzhed la/ cung zad mi mthun pa'i khyad par ni 'di yin te/ grangs can de ltar khas len pa la/ thal ba'i ngag skyon med 'di ltar 'god de/ sgra chos can ma byas par thal rtag pa'i phyir/ zhes thog mar thal 'gyur gyi dam bca' bkod la/ ci'i phyir zhes 'dri ba la sgrub pa'i thal 'gyur skyon med 'di ltar 'god de/ gang rtag na ma byas pa yin pas khyab/ dper na nam mkha' bzhin sgra yang rtag par khas blangs so shes 'god par gsungs so//¹¹⁾ (論理学の自在者たるチャパは、そのように主張するサーンキャ学派の者に対して “およそ常住ならそれは必ず生じてきたのではないものである。例えば虚空のごとし。声も常住であると〔汝は〕主張したはずだ” とだけ申し立てをするのだと説明し〔中略〕〔サパンの〕『リクテル』では、大方はこれと同じように説明しているが、少し異なる点がある。それは、そのように主張するサーンキャ学派の者に対して不合理な結論を〔先に〕のべるのである。つまり、“声を主題としてそれは生じてきたのではないものとなってしまい、常住であるから” というように最初にプラサンガの結論〔だけ〕を申し立て、〔相手が〕“何故に” と質問して後に、次のような〔喩例を含めた〕正式なプラサンガが述べられるのである。即ち、“およそ常住ならそれは必ず生じてきたのではないものである。例えば虚空のごとし。声もまた常住であると〔汝は〕すでに主張した” と述べるのであると説いている)”

ここで注意せねばならないのは、チャパとサパンのプラサンガの申し立て方が異なっていることである。サパンの方法では対論者が「何故に」と言った時にのみ三支作法による正式なプラサンガが述べられるとされている。これに対してチャパ流の作法ではまず遍充関係のみが最初に申し立てられ、その後に主題所属性が問題となされるのである。チャパ流の返答法が遍充関係の不備をいう「遍充が不成立」と主題所属性の不備をいう「因が不成立」と、そして「然り」との三種であるのはこの点から考えれば何等不思議ではない。チャパにとって重要なのはそのプラサンガに対して返答が可能かどうかであるから、その限りに於いてはこの返答法は何等不備ではない。ところが、サパンの作法に従えば、主題も所証の法も因も揃った上で判断を迫られていた訳であるから、その因が主題と、同品と、そして異品との三種の方向へどのように関係するかを判断して返答することが要求されて然るべきであろう。

十七世紀末に活躍したゲルク派の学者ジャムヤンシェーニパ ('Jam dbyangs bzhad pa, 1648-1722) は上記の問題に中立の立場をとっている。即ち、

“'dod rtags ma grub khyab pa med// khyab pa 'gal dang the tshom za// lnga po lan zhes bya ba yin// yang na khyab lan gcig tu bsdu//¹²⁾ (「然り」と「因が不成立」と

「遍充がない」と「遍充が相違」そして「疑問」[これが]五種の返答といわれるものである。あるいは、遍充[に関するところ]の返答はひとつに纏められる”

として、チャパ流とサパン流との両説を並記しているのである。

現在ゲルク派僧院で行われる問答ではサパンによる作法が更に進められ、プラサンガの結論だけが先に述べられ、それに同意しない、即ち「何故に」と返答した場合にのみプラサンガの理由句が提出されるような作法になっている。先のシャーキャチョクデンの例に従って説明すると、「sgra chos can ma byas pa yin par thal (声を主題としてそれは生じてきたのではないものとなる)」という階段で返答を一旦待つのである。そして「ci'i phyir (何故に)」と返答した場合にのみ「rtag pa yin pa'i phyir (それは常住であるからだ)」と理由句の部分が述べられる。それに対しての返答は基本的には次の三種類である。つまり、「然り ('dod)」と「遍充不備 (khyab pa ma byung)」と「論拠不成立 (rtags ma grub)」である。¹³⁾ ここで、“khyab pa ma grub”という言葉が避けられているのは十分に意義が存在するのである。

- 1) Sa skya Paṇḍita Kun dga' rgyal mtshan, *Tshad ma rigs pa'i gter* (TMRT), Sa skya pa'i bka' 'bum 『サキヤ派全書集成』 (SSKB), Vol. 5, pp. 155-1-1~167-1-6 (da, la-25a6).
- 2) 拙稿「チャパ・チューキセンゲによるプラサンガの分類」『チベットの仏教と文化』所収、春秋社、近刊。
- 3) TMRT, 166-4-3.
- 4) Sa skya Paṇḍita Kun dga' rgyal mtshan, *Tshad ma rigs pa'i gter gyi rang 'grel* (TMRTRG), SSKB, Vol. 5, pp. 167-2-1~264-2-6 (da, 26a1-220a6), 263-4-1.
- 5) Sa skya Paṇḍita Kun dga' rgyal mtshan, *Mkhas pa rnams 'jug pa'i sgo*, SSKB, Vol. 5, pp. 81-1-1~111-3-6 (tha, 163a-224a), 110-3-3.
- 6) TMRTRG, 263-4-2.
- 7) *Ibid.*, 264-1-1.
- 8) mKhas grub dge legs dpal bzang po, *Tshad ma sde bdun gyi rgyan yid kyi mun sel*, (Tohoku No. 5501), 178b1.
- 9) Śākya mchog ldan, *Tshad ma rigr pa'i gter gyi rnam par bshad pa sde bdun ngag gi rol mtsho*, Collected Works, Thimphu, Kunzang Topgey, 1975, vol. 19, p. 738-6.
- 10) Śākya mchog ldan, *Tshad ma rigs pa'i gter gyi dgongs rgyan*, Collected Works, vol. 10, p. 360-7.
- 11) *Ibid.*, 361-3.
- 12) 'Jam dbyangs bzhad pa, *bsDus sbor gyi snying po kun bsdus rig pa'i mdzod*, Collected Works, New Delhi, 1973. vol. 15, p. 480-5.
- 13) 拙稿「チベットの僧院に於ける問答の類型」『仏教史学研究』第22巻1号を参照されたい。
(仏教大学講師)